

【要旨】

都市の生成と都市文明の発達、その都市の自然環境・経済発展・歴史政権などさまざまな要素と密接的な関連があることは言うまでもない。しかし、中世東アジアの大都市である杭州は、その早期の歴史や地理的存在については、まだ十分明らかになっていない。

本稿では、まず、「禹と治水」の伝説の舞台が杭州に近隣する銭塘江であること、さらには、銭塘江に興った洪水が第四紀の海岸線の変遷により発生したものであろうことなどを指摘した。それに従えば、杭州を含む銭塘江下流域では、中国歴史の伝説時代から既に文明が生じていると推察される。

そして、先秦時代の杭州において、主に越族の国である呉と越に関する文献資料を利用した。杭州及び周辺地域の自然環境や交通条件の変遷を分析したのち、当時の杭州は銭塘江の渡し場であると判明し、その成り立ちや役割などについても検討した。尚、秦漢時代の杭州古城（銭唐県城）の具体的位置に関する議論は現在もまだ続いているが、銭唐県設置の事実から、当時の杭州では、漢民族が入植すると同時に、政治的営力が強化する動向が明らかに見られる。最後に、杭州の都市プランに関する注目すべき点は、「防海大塘」が恐らく後漢時代に造られたことである。

このような分析から、早期における杭州が都市としての成立、及び先秦及び秦漢時代の発展は、中世杭州の都市文明の繁栄に大きな影響を与えたと考えられる。

【コメント】

愛宕 元

589年、隋が陳を併合して270年ぶりの統一が達成されて銭唐県の地が杭州に昇格され、その直後に大運河が杭州まで延伸されるようになると、杭州及びその付近、すなわち浙西地方の歴史地理的な様子がかかなり具体的になってくる。10世紀以降の宋代、とりわけ杭州が行在臨安府とされる12世紀の南宋時代になると、政治・経済・文化の中核地区であるがために各種の文献史料が編纂され、それら文献学的研究によって杭州付近の歴史地理的な姿はより一層明確にされつつある。それに対して、隋唐以前、ましてや先秦時代や秦漢時代のこの地は華北の漢人にとってはほとんど未知の地であり、三国孫呉の時期になってようやく開発の端緒がつけられ、ある程度の歴史地理的な様相が明らかになる。

本発表はきわめて文献史料が少ない先秦から秦漢時期の杭州地方に関する歴史地理的な研究について、考古学の成果、古地理学、歴史地理学的なフィールドワークの手法などを幅広く活用して、今後の新たなる研究発展の可能性を強く示唆する興味深い内容であった。禹の治水伝説は黄河や銭塘江の洪水に対するものではなく、第四紀温暖期の海面上昇による海進に基づく洪水を浚渫によって治水したものが伝説化したものであるという新見解は、そのスケールの大きさや斬新な発想に大いに興味をそそられる。浙江地方の海岸線がほぼ安定し河川の流路も現在のそれに近いものとなる有史以後においては、古文献にわずかに散見する渡津が歴史地理

的な景観を復元する重要な手掛かりとなるという指摘は、まさしくその通りである。とくに川幅の長大な大河川の渡津は川中に巨大洲が形成され易いような地が古来選ばれるから、古くよりあまり渡津の位置は変動がない。ただしそれは内陸部の場合であり、大量の泥土の流下堆積で有史以後においてもかなりの海岸線の変化、つまり陸進が認められる河口付近ではやや事情が異なることに注意せねばならない。そのことと関連するが、黄河や長江などの大河の河口付近は有史以後においても大幅な陸進現象が認められることは、譚其驥主編『中国歴史地図集』などによってかなり具体的に知ることが出来るようになった。それに対して钱塘江の河口部、すなわち杭州湾は北側が海潮の逆流現象によって削られて海進が進むのとは対称的に、南側では曹娥江などの流下する泥土によって逆にかなり大幅な陸進が見られる。典型的なラップ形をした杭州湾で古来発生してきた有名な海潮の激しい逆流現象が次第に弱まってきたとされる所以である。この杭州湾の有史以後の地形的な変化は単に海潮の逆流現象の退化のみならず、居住する人間の生活空間の変化とも直接関連するものであり、杭州湾の歴史景観のより精密な歴史の変遷が明らかにされる必要がある。杭州の地には統一秦によって初めて钱塘県が置かれこの地の地方行政の一拠点とされるが、県治の所在は明確ではない。秦代の钱塘県の県治について、考古学、自然地理学、フィールドワークなどを援用した新しいいくつかの中国人研究者の研究成果が本発表で紹介されたのも有益であった。とくにフィールドワークによる地理的景観の実地における調査が歴史地理研究にとってきわめて重要な研究方法であることはあえて言うまでもないが、外国人である我々にとってはさまざまな制約のために実地調査の面で少なからざる後れを余儀なくされていることを強烈に印象付けられた。

(京都大学総合人間学部)